

対抗として登場した陽明学・朝鮮実学・古文辞学は異端ではなく、むしろ正統意識の産物であった。このことに関連して注目されるのが、本書では比較的言及が少ない朝鮮王朝の動向である。朝鮮王朝こそっとも「宋学的な諸様式」が主流を占めていた地域であり、「古文辞派」——韓国では「擬古文派」ないし「秦漢擬古派」と呼ぶ——も存在したが、「派」と呼ぶのが躊躇されるほどに相互に関わりの少ない人々が異なる時期に関心を抱いたものに過ぎなかった。しかしそれは、陽明学や清朝の学術への態度とも共通するが、朝鮮王朝の〈思想史〉における「地下水脈」と呼ぶべきものだと言える。そこから朝鮮王朝において「地下水脈」だったものが、なぜ徳川日本では表舞台に浮上し、一時的とはいえ世間を席巻するような動向を示したのかという疑問が生じてくる。この問題式を解くには「武」という関係項だけでは十分ではなく、それとは別に「俗」（『大衆化』）という項目を立てる必要がある。もちろんこれは評者の問題関心でしかないのだが、ついでに指摘しておく。

（恵泉女学園大学名誉教授）

西村玲著

『近世仏教論』

（法蔵館・二〇一八年）

藤井 淳

本書は二〇一六年に亡くなられた故・西村玲氏が生前に発表した論文を末木文美士・曾根原理・前川健一の三氏を中心となって編集・校正したもので、西村玲氏の遺稿集である。評者は西村氏と研究分野は離れているが、氏と交友があり、日本思想史学会からの依頼で書評を担当することとなった。本書の性格上、通常の書評と異なる形となることを諒解せられたい。

最初に著者である西村玲氏の略歴を紹介する。氏は一九七二年東京生まれ、東北大学文学部を卒業し、同大学博士課程を修了、博士（文学）を取得された。その後、日本学術振興会特別研究員（SPD）等を経、二〇〇八年に博士論文を元にした『近世仏教思想の独創——僧侶普寂の思想と実践』（トランスビュー、以下「普寂」と略する）を刊行、二〇〇九年に「普寂を中心とする日本近世仏教思想の研究」により、第六回日本学術振興会賞を受賞し、さらに受賞者の中で特に優れた業績に与えられる日本学士院学術奨励賞を翌年に受賞した。その後も本書に取められる諸論文を発表されていたが、闘病の末、二〇一六年

二月二日に死去された。享年四十三歳である。

西村氏はプリンストン大学でジャクリーヌ・ストーン氏を受
入先とされ、一年間宗教研究所の客員研究員として滞在された。
私は西村氏の直後に交代するように同じ条件で同大学に滞在し
たため、さまざまな便宜を図っていた。そのため私にと
って初めての長期の海外滞在をスムーズにスタートすることが
できた。また末木文美士氏が国際日本文化研究センターに転任
して共同研究として開催された研究会で『妙貞問答』の読解・
訳注と一緒にあたるなど短い期間ではあるが同じテキストを扱
った。評者が二〇一一年に就職してからはお会いする機会が少
なくなったが、西村氏に最後にお会いしたのは、二〇一五年一
二月に山形大学で行われた日本仏教総合研究会であった。そ
の時の西村氏にはいままでと変わらない元氣そうな様子に
見受けられ、廊下で簡単な挨拶をすませただけであった。その
三ヶ月後に突然の訃報の知らせに驚くとともに、最後に話をす
る機会がわずかとなってしまったことを深く後悔もした。

本書の書評を担当する評者は日本古代の空海を仏教学の立場
から研究するものであり、近世仏教については表層的な知識し
か持ち合わせていないため、不十分な書評となることをあらか
じめ断らせていただく。まず本書の目次は以下の通りである。

第I部 近世仏教の展開

近世仏教論

教学の進展と仏教改革運動

第II部 明末仏教と江戸仏教

慧命の回路——明末・雲棲株宏の不殺生思想

虚空と天主——中国・明末仏教のキリスト教批判

東アジア仏教のキリスト教批判——明末仏教から江戸仏教

へ

明末の不殺放生思想の日本受容——雲棲株宏と江戸仏教

第III部 キリシタンと仏教

近世思想史上の『妙貞問答』

近世仏教におけるキリシタン批判——雪窓宗崔を中心に

仏教排耶論の思想的展開——近世から近代へ

第IV部 教学の進展

中世における法相の禪受容——貞慶から良遍へ、日本唯識

の跳躍

可知と不可知の隘路——近世・普寂の法相批判

第V部 伝統から近代へ

釈迦信仰の思想的展開——『悲華經』から大乘非仏説論

へ

須弥山と地球説

第VI部 方法と実践

「近世的世俗化」の陥穽——比較思想から見た日本仏教・

近世

中村元——東洋人文主義の日本思想史

アボカドの種・仏の種子——仏教思想は環境倫理に何がで

きるか

西村玲略歴・業績目録／あとがき（末木文美士）／人名索引

本書の要約としては、編者の一人である末木文美士氏が「あとがき」の中で要領よくまとめている（四〇六―四〇八頁）。そのため、この書評は重複を避け、仏教学を専門とする評者の関心に上った点、もしくは方法の異なる点を重点的に取りあげて論じることを諒解されたい。

第Ⅰ部は、『日本思想史講座』（ペリカン社）、『新アジア仏教史』（俊成出版社）というシリーズに収録された近世仏教を扱った概説である。近世仏教の全体像を要領よくまとめたもので、直近までの参考文献も詳しく挙げられ、これからしばらく近世仏教の概説の標準として扱われよう。二つの論文の最終論点は重複する（三二頁、七七頁）が、第一論文「近世仏教論」は仏教以外の日本思想史との関連づけをはかり、第二論文「教学の進展と仏教改革運動」は各宗の教学を扱うなど、第一論文と互いに補完するものとなっている。

第Ⅱ部と第Ⅲ部にかけては、『普寂』第六章・第七章で扱った、僧侶が着る絹を作る際に蚕を殺すことをどう考えるかという仏教における不殺生の問題を継承して、中国仏教やキリスト教との対比を念頭に、思想的に広く位置づけたものである。西村氏が江戸時代の戒律の実践者、普寂に注目されたのは決して研究対象がマイナーであったのではなく、かえって宗派を超

えて仏教学が扱う重要なテーマを共有していることにつながっていくことがこれらの論文で示される。

第Ⅱ部は排耶論と不殺生について、明末仏教とその影響を受けた江戸仏教の関係について論じたものである。日本仏教研究はともすると日本国内の文脈のみで語ろうとする傾向が多いが、その源流となった中国仏教との関係に着眼している点は著者の慧眼であり、他分野との研究交流の可能性を示すものである。第一論文は明末の不殺生思想・第二論文は明末の仏教からのキリスト教批判を取りあげ、第三論文・第四論文で江戸時代の仏教を考察するための基礎的な分析となっている。

第四論文は第一論文を踏まえ、江戸時代の不殺生思想を論じている。近年、江戸期の出版状況を踏まえて、思想の受容のあり方が論じられるようであり、中国書に基づく和刻本および関連する書籍を対照した表（一五六―一五七頁）は西村氏の関心を着実な手法を踏まえて示したもので説得力がある。

一評者が第Ⅱ部により望むことを以下に挙げたい。日本を理解する上で中国との対比を行い、構図を示すことは確かに必要である。ただ限られた資料の中で、どこまで日本と中国の対比を単純な構図として描くことが可能かどうかは今後の課題である。西村氏は「中国仏教において形而上的なキリスト教批判は、日本仏教において宗教的な実践となった」（一四三頁）とする。思想的な研究では、何らかの構図を示す必要であろうが、資料に即して理解する立場からは、雪窓宗崔一人を代表として日

本仏教と中国仏教の違いを描き出すことには躊躇する。一方で、このような手法が新たな展開を生み出す可能性があることは第三部の評価のところで述べる。

また技術的なことで、末木氏の「あとがき」に指摘されている(四〇八頁)とおり、第二部の諸論文を西村氏が発表された時期が集中していることもあり、著者自身が編集されたら、重複する記述をより簡潔にまとめられたと思われる。同じ論点や表現を関連する別の論文で見出すことがあり、評者は重複感を持つてしまった。本書の刊行の経緯を踏まえるとやむを得ないと理解できるものの、重複する表現や既出資料との重複を明示するなどの配慮があれば読者にとってはより望ましかったと思う。

第三部の第一論文は末木氏が主催した研究会の『妙貞問答』の講読をもとにしたものである。まよめの箇所で「キリスト教を触媒として、日本仏教では「後生の助け」が、中国儒教では「孝」があらわれる」「後生の助け」に焦点が絞られる日本の宗教状況をよく示したものと言えよう」(一七九頁)と中国と日本を対比する。この対比は図式的すぎるくらいもあるが、評者は中国の三教交渉に関心があり、また親鸞に独自の研究を行った亀山純生氏の『災害社会・東国農民と親鸞浄土教』(農林統計出版、二〇一二年)で論じられた親鸞の生きた中世の背景において「後生善処」が重要であったことから、日本仏教と中国儒教の対比として検証価値のある重要な指摘といえよう。

第三論文「仏教排耶論の思想的展開」はこれまでの排耶論の諸論文を踏まえ、幕末から明治期に生きた鶴飼徹定、超然や福田行誠、さらに近代の井上円了、田辺元を扱う。近代仏教を理解する上でそれと接続する近世仏教の理解が必須のものとなることをよく示しており、西村氏の視点が広くにわたっていたことがよく分かる。「虚空」を軸として明末から近世後期にかけて思想史的に論じたことの評価は後に行う。

第四部は中世および近世の法相教学を通じて論じたもので、仏教学の分野と最も重なる論文である。第二論文は『普寂』に収められなかったものであるが、その結論には評者が最も共感を持った。普寂の思想を近世的限界もしくは近代的萌芽と見る今までの評価を一面的とし、普寂自身に「世俗」に対して一貫した距離感があったことを文献に基づいて論じ、近代の限界が指摘されている現代に再評価されるべきとする西村氏の指摘は時代の先を見つめたものと言える。

第五部の第一論文は仏教学において重要な「大乘非仏説」を『普寂』第五章に引き続き、思想的に論じたもので、これも近世から近代への接続、そして現代の仏教学にもつながるテーマを基礎的に扱ったものである。仏教学では、ごく最近大竹普氏によって『大乘非仏説をこえて——大乘仏教は何のためにあるのか』(国書刊行会)が刊行され、今後の議論が期待される。

第二論文「須弥山と地球説」は岩波思想講座において、近世における西洋と対峙した仏教宇宙観を概説したもので、『普寂』

第四章からの関心に接続している。

第Ⅵ部第三論文「アボカドの種・仏の種子——仏教思想は環境倫理に何ができるか」は変わったタイトルであるが、仏教の不殺生の問題を現代の欧米の仏教理解との関係から論じたものである。控えめな記述であるがゆえに、現代の環境倫理に関心をもつ人々がどのように仏教を理解しているかを信頼性における記述で簡潔に紹介している。

以上、評者の関心に上った点を中心に本書を紹介してきた。再説になるが「あとがき」に末木氏による要約と本書刊行についての経緯が述べられるのでご覧いただきたい。

最後に日本仏教を仏教中心に専攻するものとして、いくつかの点を批判的に述べさせていただく。本書の著者である西村氏から再批評をいただけない点は承知しているが、立場の違いを示すことでいささかでも学界に貢献できるのであれば、西村氏も受け入れていただけるものと考ええる。

西村氏は本書中でしばしば「近世化」と表現する。これと関連して、評者の念頭に上がったのが、インド・中国仏教を専門とするマイケル・ラディッチ氏（現・ハイデルベルグ大学教授）による二〇一五年二月の京都大学での口頭発表である。そこで氏は主として中国仏教研究における「中国化」(sinification)という語を批判的に振り返り、今までの欧米の仏教研究者が「中国化」とは何なのかを具体的に議論せずに、自明の説明として用いていると指摘した。この批判はさまざまな場面に広く適用

できる刺激的なものである。ラディッチ氏の批判は地域的な変化についてのものであったが、「近世化」という時代的なものは概念規定がより明確であるべきである。どの時代でもそれぞれ特色はあるのであり、「近世化」は近年の議論から影響を受けた表現（曾根原理氏御教示）と推測するが、本書では中世後期からの展開が明らかにされていないため、明確ではないことが惜しまれる。

「虚空」について、京都大学名誉教授の荒牧典俊氏（仏教学）と二〇一八年六月八日に会話した点を踏まえて述べる。氏は本書とは関係はなく、同日の講演会での江戸文学の批評で用いられた「虚空」の理解に対して批判的に「虚空は（インド仏教では）単純な空間ではない」と話をされていた。それと同じ視点で西村氏が「（明末の費隱の）神と対峙する虚空の普遍性は完全に忘れ去られ、（幕末の超然では）虚空は無意味な近代的空間となった」（二三頁、括弧内は評者）とする指摘は、より多くの文献を調査する必要があるが、「虚空」の理解が近世後期から近代にそれ以前の理解から変化した可能性を述べる、仏教学としても検証する価値のある重要な論点である。

九三頁に雲棲株宏が『自知録』で述べた根拠として、大正蔵の曇無讖訳『金光明経』の末尾にある『金光明経減罪伝』が挙げられる。これは中国で付け加えられた箇所、西村氏は中国に広く見られる一般的な考え方を紹介したものと推測されるが、株宏自身が『金光明経減罪伝』を明確に踏まえて記述している

かどうかは前後の文脈からは評者には理解しがたい。

西村氏は研究の端緒で、諸宗派から批判される普叙を取りあげた。かえってそのことが、戒律や不殺生・須彌山説の問題で浄土宗・曹洞宗・臨済宗・浄土真宗・天台宗といった諸宗派に共通し、さらに現代につながる問題を扱うことを可能にした。その点で西村氏の成果は宗学・仏教学を研究するものにとっても研究の新たな方向について示唆を与えるものであろう。

西村氏が生きておられたら、近世仏教のみならず、それと接続する近代の仏教や中世後期の仏教、さらに近世の宗学の研究者に大いに刺激を与えたと思う。「日本近世仏教の研究は、中世と近代の仏教との内的関連を踏まえながら、東アジア仏教思想史として進められる必要がある」(一五一頁)と述べられていることがまさに氏が広い視点を有していた記述である。そしてその穏やかな性格から教育者としても後進者を育てられたことであろう。また西村氏は海外の研究者との交流も多く、学界において今後活躍されることが期待された。その西村氏と再び話をするのができなくなったのは評者の痛恨の極みである。多くの関係者が末木氏の発案によって協力をして刊行した本著に対して、時間の限られた中で不十分な書評しかできなかったことは申し訳ない。これからの世代に何らかの形で繋いでいくことが唯一西村氏に報いることと感じている。

(駒澤大学准教授)

裴寛紋著

『宣長はどのような日本を想像したか』

『古事記伝』の「皇国」

(笠間書院・二〇一七年)

板東 洋介

一 宣長論の趨勢

丸山眞男や西郷信綱にはじまる戦後の本居宣長研究の基調は、宣長を「物の哀れ」「真心」等々の感性的平面(あるいは伝統的情緒)に似すわり、頑固に近代化・西洋化を拒み続ける文化ナシヨナリストの濫觴にして首魁とみなし、宣長との徹底的な「対決」(相良亨『本居宣長』一九七八年)をはかるものであった。しかし一九九〇年代に入ると、そうした「対決」姿勢自体が(その意図に反して)宣長が主張し体現するところの、時代を貫いて不変な「日本的なるもの」の観念を無傷で保存し続けることが、子安宣邦らによって強く批判されるに至った。たしかに或る人の有するイデオロギーを最も鞏固に信じているのは、その敵なのである。とはいえこの新しい宣長論は、冷戦の終結や日本の経済大国化を背景として、歴史教科書問題等の形をとって丁度その頃再噴出をはじめた日本のナシヨナリズムへの牽制という、前代以上の強いアクチュアリティに伴われていた。俯